大学における居場所の描画と感情状態の関連性について

○福永瑞樹¹・横田正夫²

(¹ 日本大学大学院文学研究科・² 日本大学文理学部)

キーワード：居場所 描画 感情状態

The association of drawing of place in a society in the university and the feelings state

Mizuki FUKUNAGA¹, Masao YOKOTA²

(¹Graduate School of Literature and Social Science, Nihon Univ, ² College of Humanities and Sciences, Nihon Univ)

Key Words: place in a society drawing feelings state

目 的

居場所の確保は、心の健康の維持のために重要となろう。これまでの研究において、杉本(2009)は居場所には環境要因と感情要因が組み合わさっていると述べ、田島(2000)は「居場所」感覚と抑うつについて調査し、「居場所」の無い者は自分に対して否定的で抑うつ感が強いことを報告した。このように居場所の確保は抑うつと関連することが示されたが、その他の感情要因についての検討はなされていない。

そこで本研究では居場所とそこでの感情状態との関連性について調査することとした。

方 法

参加者：参加者は大学生 51 名（男性 24 名，女性 27 名），平均年齢は 20.1 歳（ $SD=1.2$ ）であった。

調査期間：調査期間は 2011 年 7 月から 12 月。

質問紙の構成：感情状態を調べるために、日本版 POMS（以下 POMS）を使用した。POMS（65 項目，5 件法）は「過去 1 週間」の気分や感情状態を測定する質問紙。緊張－不安，抑うつ－落ち込み，怒り－敵意，活気，疲労，混乱の 6 尺度で構成されている。その他の質問項目として通学期間，大学に居心地のよいところがあるかどうか，を問う項目で構成されている。

居場所の描画：居場所の描画について，居場所が有る場合は，B4 用紙に居心地のよい場所を鉛筆で描画するように求められ，居場所が無い場合には大学の様子を描画するように求められた。色彩については色鉛筆（12 色），色ペン（12 色）が用意されたが，色彩を求めることはなかった。必要があれば消しゴムを使用した。描画時間をストップウォッチで計測した。

手続き：参加者には前もって，やめなければいつでもやめられることを伝えた。調査は個別式に行われ，まず質問紙への回答を求めた。次いで，描画を求め，描画終了後，描画の内容について，居場所が有る者には「どうしてそこが居心地がよいのか」「そこには一人で行えるのか，それとも誰かといえるのか」などを尋ね，居場所が無い者には「大学に居心地のよいところがない理由」などを尋ねた。所要時間は約 25 分程度であった。

結 果

居場所所有群と居場所無群の人数：居場所の有無について質問し，得られた回答によって居場所の有る者を居場所所有群，無い者を居場所無群としたところ，それぞれ 48 名と 3 名であった。本研究参加者のほとんどは大学構内に居場所を有していた。

作品の分類の結果：作品は 4 つのカテゴリーに分類された。それらは，①大学の構内図を描いた「地図」(13 名)，②居心地のよい所だけを描いた「居場所」(16 名)，③場所が重要ではなく“この人たち”という空間が居心地がよい”という絵を描いた「心理的居場所」(14 名)，④文字だけが書かれた作品と，居場所無群のかいた作品を合わせた「その他」(8 名)であった。

これら 4 つの作品タイプとその他の 8 つ指標として，“色の有無”“居場所の数”“何の絵か”“人の有無”“誰と居るか”“絵が平面的か立体的か”“余白の多さ”を用いて，潜在的な因子があるかを確認するため，数量化Ⅲ類によって分析的に行った（表 1）。その結果，一次元は＋方向にカテゴリースコアの高いものは「居場所なし」(3.57)や「文字」(2.92)があり，一方向には「教室の絵」(-1.10)があった。これらのカテゴリーから一次元は，絵で描くか，かな文字で示すかに関わり「絵・文字」を示していると考えた。二次元は＋方向にカテ

リースコアの高いものは「居場所なし」(3.07)あり，一方向にカテゴリースコアの低いものは「地図」(-2.22)「居場所複数」(-1.13)「誰かといえる」(-1.61)であった。これらのカテゴリーから二次元は「居場所の多さと質」に関連すると思われた。これら 2 つの次元についてのサンプルスコアを中央値（一次元:-0.3160，二次元:0.4179）を基に，参加者を低群と高群に分けて t 検定を行った。その結果，一次元では，低群（25 名:-0.60±0.19）の方が高群（25 名:0.61±1.12）より有意に「混乱」が高い傾向が示された（ $t(48)=1.71$ $p<.10$ ）。二次元では，高群（25 名:0.82±0.47）の方が低群（25 名:-0.81±0.69）より有意に「混乱」が高かった（ $t(48)=2.41$ $p<.05$ ）。その他の POMS の尺度には有意な差が認められなかった。以上のことから教室を描く傾向の者，ならびに居場所の無い者では心理的な混乱が大きいたことが明らかになった。

表 1 分類カテゴリーの分析

	カテゴリースコア	
	第一次元	第二次元
地図	-0.32	-2.22
居場所	-0.64	0.77
心理的居場所	-0.78	0.96
文字	2.92	-1.21
居場所なし	3.57	3.07
色あり	-0.49	0.23
色なし	0.32	-0.15
居場所複数	0.33	-1.13
居場所ひとつ	-0.65	0.53
サークル	-0.82	1.02
教室	-1.10	1.19
その他	0.96	0.49
人あり	-0.79	0.80
人なし	0.51	-0.52
ひとり	-0.52	-0.98
誰かと	0.67	-1.61
どっちも	-0.37	0.41
絵でない	3.25	-0.59
2D	-0.56	-0.74
3D	-0.29	1.01
全体	-0.34	-0.32
部分	-0.54	0.53
固有値	0.49	0.39
説明率	21.64	17.22

考 察

本研究において，教室を描くことと居場所が無い者においては，POMS の混乱との関連が示され，大学構内での居場所の有無が，心の健康に関連することが示唆された。しかし，混乱以外の感情状態との関連は示されなかった。本研究で使用した POMS は，過去 1 週間の感情状態を測定しているため，過去一週間の教室内での体験か一過性のものとして結果に現れているとも考えられる。大学構内での心の健康を調べる指標を得るために更なる検討が求められる。